

中学校 国語

中学校国語科において古典に親しむ態度を育成するための指導法の研究

－『平家物語』の学習における課題解決学習の単元構築－

義務教育課 研究員 館山 知昭

要 旨

本研究では、中学校国語科の古典の指導において、課題解決学習の単元を構築するとともに学習過程に意図的に言語活動を取り入れることで、古典に親しむ態度を育成しようとした。「武士の生き方について考えよう」というテーマを設定して『平家物語』を読ませ、場面の比較読みを通して生徒自身に学習課題を設定させた。そして、書く活動と話し合う活動を通して学習課題に対する自分の考えをまとめさせた。この指導の工夫は古典に親しむ態度の育成に有効であった。

キーワード：中学校 国語 古典に親しむ態度 課題解決学習 言語活動 平家物語

I 主題設定の理由

中学校国語科における古典の指導では、古典に親しむ態度を育成することが重視されている。現行の中学校学習指導要領（平成10年12月）の下でも、古典に親しむ態度を育成するために様々な工夫や実践が行われてきた。しかし、古語に対して抵抗感を抱いている生徒が少なくないことや、教師主導の講義型授業が多いことなど、従来の古典の指導に関する問題点や課題が挙げられている。

古典は本来魅力的なものである。古典を学習し、古人の感性や英知に触れることで新たな発見をしたり人生の教訓を得たりする喜びや、声に出して読んだときの古典特有の響きの美しさを知ることができる。そういった魅力があるからこそ、古典は現代まで長く受け継がれているのである。しかし、筆者の古典の指導を振り返ると、果たしてその魅力を伝えることができていたか疑問であり、やはり教師主導の講義型授業になっていたと反省している。今回、学習指導要領が改訂され、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設定されたことは、筆者のこれまでの古典の指導の反省、従来の古典の指導の問題点や課題を踏まえて、指導を改善するよい機会であると捉えた。

そこで、生徒が主体的に古典の学習に取り組み、古典の魅力に迫れるような学習活動の工夫を通して、古典に親しむ態度を育成するための指導法を模索したいと考え、本研究主題を設定した。

なお、教材には『平家物語』を使用した。『平家物語』には、立場や生き様、価値観の異なる様々な人物が描かれている。それらの人物について自己との関わりで考えさせることで、古典に親しむ態度を育成できると考えた。

II 研究目標

『平家物語』の学習において、課題解決学習の単元を構築するとともに、学習過程に意図的に言語活動を位置付けることにより、古典に親しむ態度を育成することができることを、実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

『平家物語』の学習において、次の手だてを用いることで、古典に親しむ態度が育成されるであろう。

- ・主体的に学習に取り組めるように、課題解決学習の単元を構築し、単元を貫くテーマを設定するとともに、場面の比較読みを通して生徒自身に学習課題を設定させ、それについて自分の考えをまとめさせること。
- ・自分の考えを広げ、深めさせるために、思考を整理する書く活動と、他の生徒の意見とを比較し磨き合う話し合う活動を学習過程に意図的に設定し、言語活動を充実させること。

IV 研究の実際とその考察

1 従来の古典の指導の問題点と対応

(1) 従来の古典の指導の問題点

生徒が古典の学習に対してどのように考えているかを把握するため、第2学年の生徒に対して「古典の学習に対する意識調査」を行った。その結果、図1のように、「国語の学習は好きですか」という質問に対して、「嫌い」又は「どちらかといえば嫌い」と回答した生徒の割合は23.0%で、「古典の学習は好きですか」の質問に対して、「嫌い」

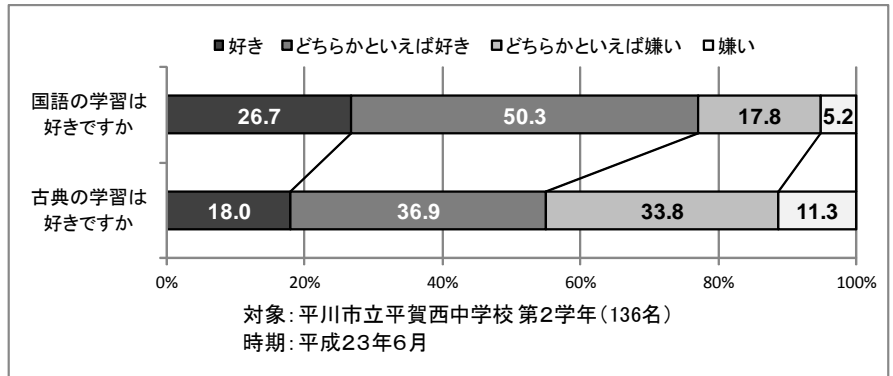


図1 古典の学習に対する意識調査

又は「どちらかといえば嫌い」と回答した生徒の割合は45.1%であった。

この結果から、生徒は国語の学習全般に対するより、古典の学習に対してマイナスイメージを持っているということが分かった。

また、古典の学習に対して、「嫌い」又は「どちらかといえば嫌い」と回答した理由として多かったことは、「古語が難しいから」、「歴史的仮名遣いが難しいから」、「現代語訳が難しいから」などであった(右表)。

表 古典の学習に対して「嫌い」又は「どちらかといえば嫌い」と回答した理由

・古語が難しいから	15名
・歴史的仮名遣いが難しいから	9名
・現代語訳が難しいから	6名

(2) 対応

ア 古典の原文と現代語訳を使い分けたテキストの工夫

中学校における古典の指導において、指導の意図や学習活動の内容によって、原文と現代語訳を適切に使い分けることが大切だと考える。例えば、古典特有のリズムを味わいながら朗読するなどして古典の世界に親しむ場合には原文を、古典に表れたものの見方や考え方について読み取らせる場合には、原文以外に、現代語訳やあらすじを付けるなどの使い分けを工夫する必要がある。

検証授業では、教科書に掲載されていない場面に現代語訳のテキストを使用した。

イ 傍注テキストの工夫

大村(1983)は、古典を指導する際のテキストとして、図2のような傍注テキストを使用し、古語への抵抗感を取り除く工夫をしている。「このようなテキストによって、原文を少しゆるやかに読み聞かせると、右側の書き入れが本文と一しょに目に入って、耳に古典の原文の調子聞き、原文にじかに触れつつ、意味は口語で受けとめられていくと考えたのである」と述べている。

検証授業では、教科書に掲載されている場面に傍注テキストを使用した。

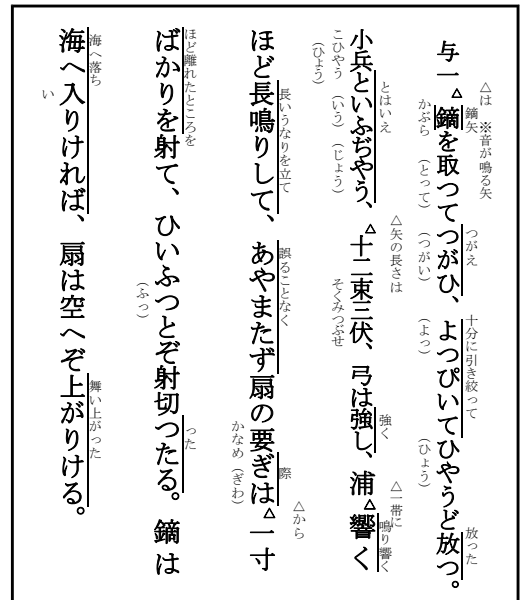


図2 傍注テキストの例

2 古典に親しむ態度について

古典に親しむ態度とは具体的にはどのような態度であるのかについて、中学校学習指導要領には明記されていない。しかし、『高等学校学習指導要領解説 国語編(平成22年6月)』では、具体的に次のような内容が示されている。

- ・日常生活において古典や古典に関連する文章を読むことを通して、古典の中の人間の生活や人生を知り、自らの生き方を見つめ直すとともに進むべき方向を模索しようとする態度
 - ・古典などの表現から自らの思考や感情を表現する様々な方法を見だし、表現に生かそうとする態度
これを基に、中学校段階で求められる「古典に親しむ態度」を次のように考えた。
 - ・様々な種類の古典に興味・関心をもち、進んで読み味わおうとする態度
 - ・古典に描かれた古人のものの見方や考え方と、現代に生きる自分たちのものの見方や考え方を比較し、自分の考えを広げ、深めようとする態度
 - ・古典に触れることによって得た知識を、様々な場面で活用しようとする態度
- 指導に当たっては、三つのうちのどの態度を育てたいのか、ねらいを明確にした指導計画の作成が必要である。

3 古典に親しむ態度を育成するための指導法の工夫

本研究では、『平家物語』の学習において、登場人物の心情を考える学習を中心に行いたいと考えた。そのため、前述の三つの態度の中から、「様々な種類の古典に興味・関心をもち、進んで読み味わおうとする態度」と「古典に描かれた古人のものの見方や考え方と、現代に生きる自分たちのものの見方や考え方を比較し、自分の考えを深め、広げようとする態度」を育成しようと考えた。そして、次のように指導法を工夫した。

(1) 課題解決学習の単元の構築

古典を進んで読み味わわせるためには、主体的に古典の学習に取り組ませる手だてが必要である。そのために、課題解決学習の単元を構築することが有効であると考えた。生徒が古典作品の世界に触れ、そこに描かれていることを自分の価値観や経験に照らして、疑問を抱いたり違和感を覚えたりしたことを学習課題として設定する。そして、その学習課題について自分の考えをまとめることで、教師主導の講義型授業とは違う主体的な学習ができるだろう。

そのためには、学習課題の設定の仕方を理解させるような学習過程の工夫も必要である。

(2) 学習過程への言語活動の位置付け

設定した学習課題について自分の考えを広げ、深めるためには、他の生徒と話し合う活動が有効であると考えた。そこで、次のような言語活動を学習過程に位置付けることにした。

ア 思考を整理するための書く活動

自分の考えをノートに書くことによって、思考を整理し、はっきりと意識化・視覚化することができるようにした。また、他の生徒と話し合う活動を通して得たことをノートに書き込むことにより、さらに思考・判断が促されるようにした。

イ 自分の考えを広げ、深めさせるための話し合う活動

自分の意見と他の意見を比較し、磨き合いをすることで考えを広げ、深めさせたいと考え、次のような話し合う活動を、学習場面に応じて使い分けることにした。

- ・ペア学習……隣の生徒とペアを組ませ、意見を交流させる。
- ・学級全体での意見の交流……ペア学習の後に、学級全体で意見を交流させる。意見を発表させる際には、教師が意図的に指名する。
- ・グループ学習……近くの4人でグループを作り、意見を交流する。意見は自由に発表させ、まとめさせる。

4 検証授業

(1) 検証授業の対象及び実施期間

ア 対象：平川市立平賀西中学校 第2学年2組（35名）、3組（34名）

イ 実施期間：平成23年6月30日～7月15日（12日間）

(2) 指導計画

ア 単元名 「武士の生き方について考えよう —『平家物語』—」

イ 単元の目標

『平家物語』に描かれた武士の生き方について、現代に生きる自分たちとの関わりで考え、ものの見方や考え方を広げ、深めようとする

（〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕 (1)アの(イ)）

ウ 指導計画 (10時間)

	主な学習活動	言語活動
導入 (1時)	<p>単元を貫くテーマ「武士の生き方について考えよう」を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○武士に対するイメージを確認する。 ○『平家物語』の歴史的背景について把握する。 ○「祇園精舎」場面を音読し、内容を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・KJ法によって武士に対するイメージを出し合い、まとめる。(グループ)
展開I (256時)	<p>「那須与一」の場面と「弓流」の場面の比較を通して、学習課題の設定の仕方を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「那須与一」場面を学習する。(傍注テキスト) <ul style="list-style-type: none"> ・音読し、内容を理解する。 ・与一の心情について考える。 ○「弓流」冒頭の場面を学習する。(傍注テキスト) <ul style="list-style-type: none"> ・音読し、内容を理解する。 ○学習課題「二つの場面の比較を通して、筆者が書きたかったことは何かを考えよう」 <ul style="list-style-type: none"> ・何と何を比較すればよいか、比較の視点を見付ける。 ・比較を通して、主題の違いについて考える。 ○課題作文を書く。 課題「あなたは源氏方の武士としてこの場にいました。これまで学習したことを振り返りながら、今回の与一の行動を見て感じたことを書きなさい」 	<ul style="list-style-type: none"> ・発問に対する自分の考えをノートに書き、その後話し合う活動を行う。(ペア→全体) ・自分の考えをノートに書き、その後話し合う活動を行う。(ペア→全体) ・自分の意見と、話し合う活動で書き足した他の生徒の意見を参考にして、課題作文を書く。
展開II (7510時)	<p>「敦盛最期」の場面と「篠原合戦」の場面の比較から、学習課題を設定し、自分の考えをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「敦盛最期」場面を学習する。(傍注テキスト) <ul style="list-style-type: none"> ・音読し、内容を理解する。 ○「敦盛最期」の場面と「篠原合戦」(現代語訳テキスト)の場面を比較する。 <ul style="list-style-type: none"> ・登場人物相関図を作成する。 ・学習課題を設定し、自分の考えをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一文ごとに交互に話し合う。(ペア) ・比較する人物について話し合い、学習課題を設定する。(ペア) ・学習課題についての自分の考えをノートに書き、その後話し合う活動を行う。(ペア→全体)

(3) 課題解決学習について

「武士の生き方について考えよう」を単元を貫くテーマとして設定し、登場人物の心情を考える学習を中心に行いたいと考えた。登場人物が置かれた状況などを踏まえて心情や価値観について考えさせ、それを生徒自身の価値観と比較させるようにした。

また、関連のある二つの場面の比較読みを通して学習課題を設定させたいと考え、次のように学習の展開を工夫した。

ア 展開Iの学習について

展開Iでは、「那須与一」の場面と「弓流」の場面の比較を通して、学習課題の設定の仕方を理解させることをねらいとした。

この二つの場面には、与一が扇の的を射た後と老武士を射殺した後での、源氏と平氏の反応の違いが対照的に描かれている。それを比較の視点として、主題の違いを考えさせようとした。そのために、まず、「敦盛最期」の場面の主題を考えさせ、その後「弓流」冒頭の場面を加え、「二つの場面の比較を通して、筆者が書きたかったことは何かを考えよう」を学習課題として提示した。

イ 展開IIの学習について

展開IIでは、「敦盛最期」の場面と「篠原合戦」の場面の比較させることによって生徒自身に学習課題を設定させ、それについて考えをまとめさせることをねらいとした。

この二つの場面には、敵を討つ人物と討たれる人物がそれぞれ登場し、同じように話が展開するのだが、結末が全く逆になっている。

このことから、二つの場面の登場人物の情報を整理させ比較の視点を見付けさせることで、自分たちの学習課題が設定できると考えた。

具体的には、ペアで協力して「敦盛最期」の場面と「篠原合戦」の場面の登場人物相関図を作成させた。

まず、二つの場面の主要登場人物のキャラクターカードを作成し、テキストに書かれている情報をまとめさせ、次に、立場や行動などのコメントや関係性の矢印などを書き込ませ、整理させた。(図3)

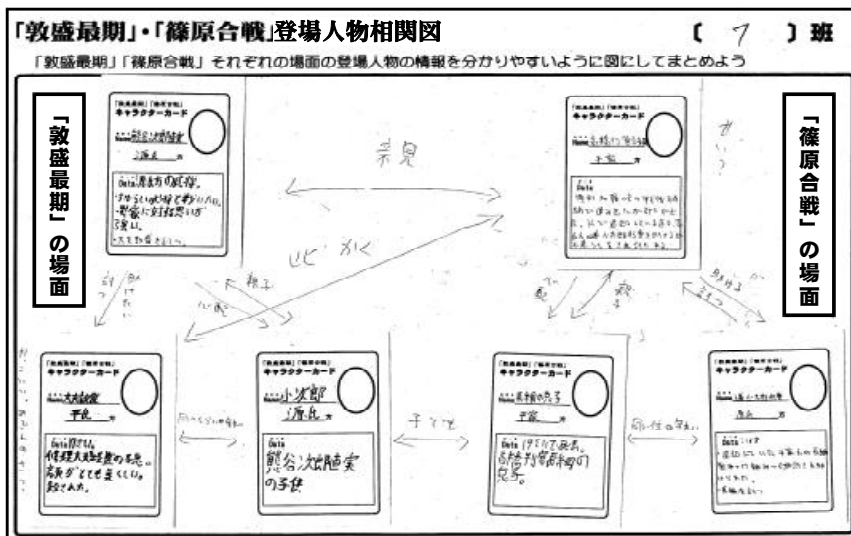


図3 登場人物相関図の例1

この登場人物相関図をもとに、二つの場面から対応する二人の人物を選び比較させることで、疑問を抱いたり違和感を覚えたりしたことを学習課題として設定させた。学習課題の設定はペアで行った。

(図4)

なお、設定した学習課題に対して自分の考えをまとめさせ、さらに、ペアや学級全体で話し合う活動を行いたいと考えていたが、時間がとれず、まとめさせることができなかった。

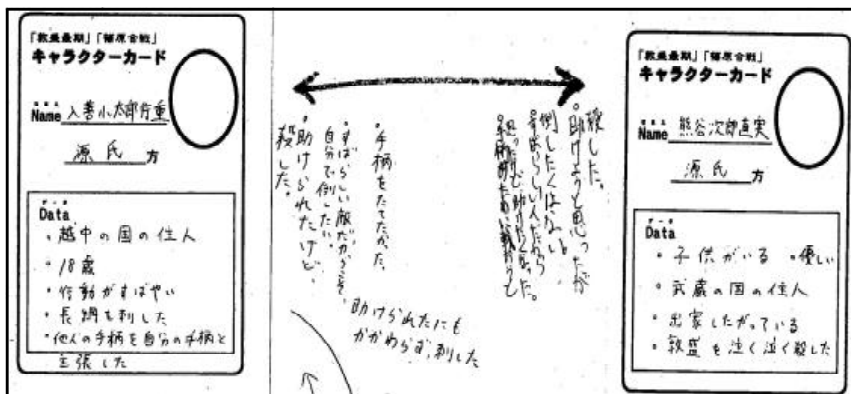


図4 登場人物相関図の例2

(4) 考えを広げ、深めさせるためのノート等の工夫

思考を整理させるため、図5のようにノートの記入の仕方を指導した。

まず、発問や課題に対する最初の意見を鉛筆で記入させた。次に、ペア学習などの話し合う活動を行い、自分と異なる意見や参考になる意見を赤ペンを使って記入させた。他の生徒の意見には、その意見を述べた生徒の名前も記入させた。さらに、それらをもとにして広げ、深めた考えをまとめの意見として鉛筆で記入させた。

また、展開Iのまとめとして、次のような課題で作文を書かせた。

あなたは源氏方の武士としてこの場にいました。これまでの学習を振り返りながら、今回の与一の行動を見て感じたことを、原稿用紙の使い方に従って、250字以上 300字以内で書きなさい。

展開IIでも同様に課題作文を書かせる予定であったが、時間がとれず、書かせることができなかった。

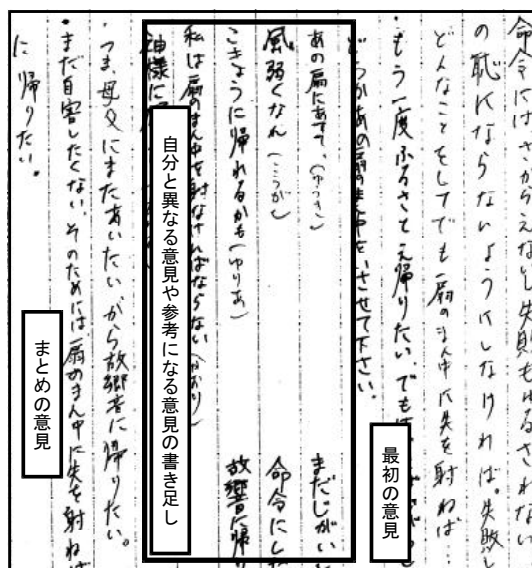


図5 ノートの記入の仕方の例

5 考察

(1) 課題解決学習について

展開Ⅱの学習において生徒がペアで設定した学習課題を、次の基準で分析した。

- A：比較の視点が明らかで、武士の生き方について考えようとしている学習課題
B：比較の視点が明らかだが、武士の生き方について考えようとしていない学習課題
C：比較の視点が明らかではないが、武士の生き方について考えようとしている学習課題
D：比較の視点が明らかでなく、武士の生き方について考えようとしていない学習課題

なお、ノートの未回収により、学習課題を確認できたのは34ペア中20ペアだったため、20の学習課題を分析対象とする。

まず、比較の視点を明らかにして学習課題を設定しているかについて分析した。図6のAとBを合わせて90.0%の学習課題が、誰と誰を対応させて考えるのか、比較の視点を明らかにしていた。

これは、展開Ⅰと展開Ⅱを通して、二つの場面を比較して読むという共通した方法で学習課題の設定の仕方を理解させたことが効果的だったと考える。さらに、展開Ⅱでは登場人物関連図を作成したことにより、比較する内容を整理したことが効果的だったと考える。

次に、武士の生き方について考える学習課題を設定しているかについて分析した。図6のAとCを合わせて80.0%の学習課題が、武士の生き方について考える学習課題だった。

次は、生徒が設定した学習課題の一部である。

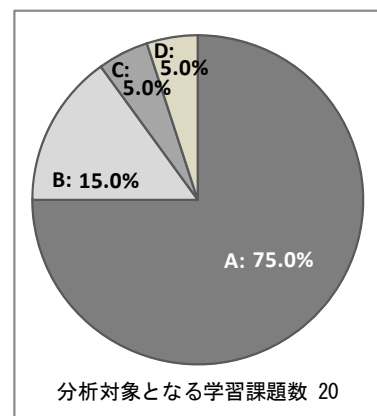


図6 学習課題の分析結果

- ・入善行重と平敦盛の善悪について考えよう。（殺したか、殺されたか）
- ・殺す側の源氏と、殺される側の平家の気持ちを考えよう。
- ・熊谷と入善小太郎行重を比較して、当時の武士の手柄や事情などを考える。
- ・行重と直実の、敵を討った後の気持ちの違いを考える。
- ・源氏の二人の武将が平家の武将を討った後の態度はどういう違いがあるか。
- ・敵を助けた長綱と、敵が助けようとしたにもかかわらず、「殺せ」と言った敦盛を通して、平家の武士について考えよう。

このように、設定した学習課題は、主体的に古典の文章を読もうとするものとなっていた。また、学習課題に対するまとめとして、生徒自身が書いた考えを紹介する。

学習課題：人として正しい直実と武士として正しい行重を比べ、武士とは結局どういうものなのか考える。

自分の考え：私は、人を殺すのが仕事でも出家したりすることも必要だと思うし、武士として手柄にすることも必要だと思う。だから、どちらが正しいのというのではないと思う。武士とは人のことを考え、時にはすばらしい敵と命をかけて戦う誇らしい人たちではないかと思う。

学習課題に対する自分の考えの中で、「どちらが正しいのではない」と、登場人物のおかれた立場を理解しながら、現代に生きる自分の考えとを比較して判断し、まとめている。これは、今回の学習で育成を図った古典に親しむ態度の表れであると考えられる。

ただし、検証授業では、時間がとれず、全員に考えを書かせたり話し合う活動を行ったりすることができなかった。そのため、検証のためのデータが収集できず、展開Ⅱの課題作文を分析することができなかった。

(2) 言語活動について

展開Ⅰの課題作文とノートと比較し、ペア学習などの話し合う活動によって考えが広がり、深まったかを、次の視点で分析した。

- ・ 考えの広がり……話し合う活動によってノートに記入した他の生徒の意見が、課題作文に書かれているか。
- ・ 考えの深まり……ノートに記入した最初の意見から、話し合う活動を経て、新たに考えた意見が書き足されているか。

分析の基準は次のとおりである。

- A：考えの広がり、深まりが読み取れる。
- B：考えの広がり、深まりが読み取れるが、
考えの深まりが読み取れない。
- C：考えの広がり、深まりが読み取れないが、
考えの深まりが読み取れる。
- D：考えの広がり、深まりが読み取れない。

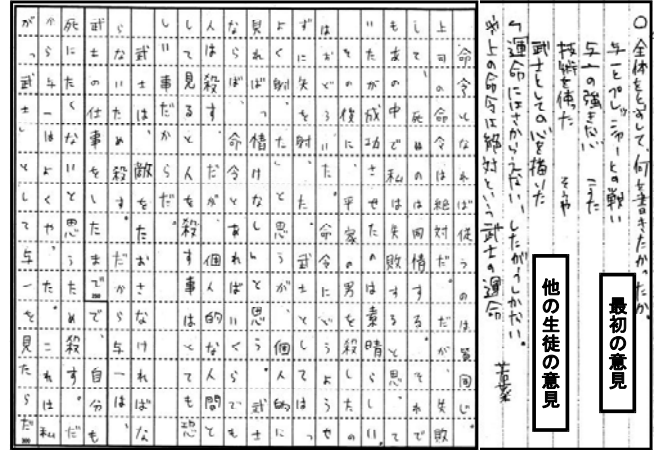


図7 課題作文とノートの例

なお、ノートの未回収により、課題作文とノートの比較ができたのは69名中41名だったため、41名分のノートと課題作文を分析対象とする。

図7は、生徒の課題作文とノートの例である。

この課題作文の場合、ノートに記入した他の生徒の意見が書かれていて、新たに考えた意見がさらに書き足されているため、「A」と判断した。その他の課題作文についても同様の方法でノートと照らし合わせ、上記の基準で判断した。

図8のように、課題作文の分析の結果から、A、B、Cを合わせた90.2%の作文に考えの広がり、あるいは深まりが見られた。これは、話し合う活動や書く活動によって、自他の意見がノートに整理され、そこから判断したことを課題作文に取り入れることができたためと考えられる。

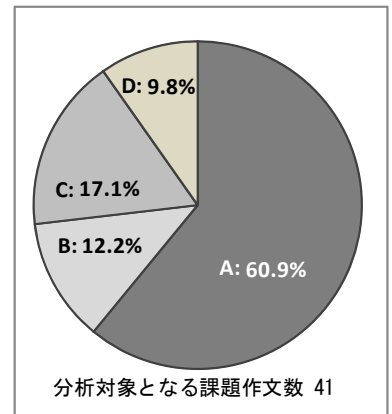


図8 課題作文の分析結果

また、検証授業後の「古典学習に対する意識調査」で、書く活動と話し合う活動について、意見や感想を記述させた。

ペア学習などの話し合う活動に対して、肯定的な意見を書いた生徒が69名中57名で、その中の33名が「他の人の意見が参考になった」と回答している。回答の中には、「理解の助けになった。考えを深めることができた」という記述や、「ノートを見返したときに（他の人の意見が）書いてあると分かりやすい」という記述もあった。

課題作文や生徒の意見から、書く活動や話し合う活動といった言語活動は、学習課題についての自分の考えを広げ、深めるための手だてとして効果的だったと考える。

(3) 検証授業前後の古典の学習に対する意識の変化について

検証授業前後の「古典の学習に対する意識調査」において、検証授業を行った学級（2・3組）と検証授業を行っていない学級（1・4組）とで、古典の学習に対する意識の変化の比較を行った。

なお、検証授業を行っていない学級では、第2学年担当の国語科担任が、課題解決学習を取り入れていない授業を行っている。

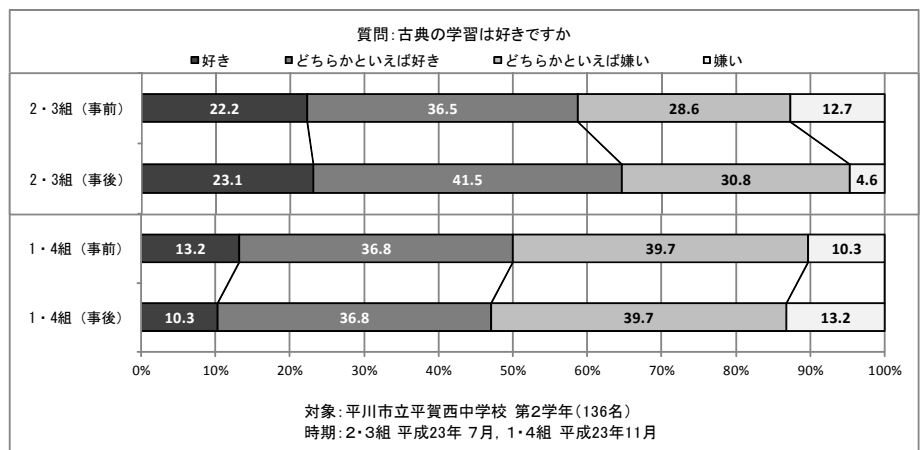


図9 古典の学習に対する意識調査（事前・事後）

質問「古典の学習は好きですか」について、検証授業を行った学級では、「好き」又は「どちらかといえば好き」と回答した生徒が、58.7%から64.6%と、5.9ポイント増加している。一方、検証授業を行っていない学級では、50.0%から47.1%と、2.9ポイント減少している。(図9)

検証授業を行った学級で、「好き」、「どちらかといえば好き」と回答した生徒の理由には、「今回の授業を終え、現代の物語とは違う奥深いものだと分かったから」、「現代の文とは内容が違うので、読むのが楽しい。また、現代の人には分からない武士の気持ちが分かるのでよいと思う」、「昔の人の気持ちを考えるのが楽しいから」といった意見が書かれていた。

古典の学習が好きな生徒の割合が増えたことは、本研究における指導の工夫によって、主体的に古典を読み、古典に親しむ態度が育成できたからではないかと考える。

V 研究のまとめ

1 課題解決学習の単元構築について

展開Ⅱで生徒が設定した学習課題を分析したところ、分析の対象となった学習課題のうちの8割以上が、比較の視点を明らかにし、武士の生き方について考えようとする学習課題であった。これは、「武士の生き方について考えよう」という単元を貫くテーマを設定したことや、展開Ⅰ、Ⅱを通して、二つの場面を比較して読むという共通した方法で学習課題の設定の仕方を理解させたことが効果的だったと考える。さらに、展開Ⅱで登場人物相関図を作成したことにより、比較する内容を整理したことが効果的だったと考える。

2 学習過程への言語活動の位置付けについて

課題作文を分析したところ、分析の対象となった課題作文のうちのほぼ9割に、考えの広がり、あるいは深まりが見られた。これは、話し合う活動や書く活動によって自他の意見が整理され、そこから判断したことを課題作文に取り入れることができたためと考えられる。これらの言語活動は、学習課題を解決するために効果的だったと考える。

以上の二つの指導の工夫により、学習課題の設定や課題作文のまとめにおいて、『平家物語』を進んで読み味わおうとする態度が見られたとともに、描かれた人々のものの見方や考え方や自分のものの見方や考え方を比較し、考えを広げ、深めようとする態度が見られた。このことから、二つの指導の工夫は古典に親しむ態度の育成に効果的だったと考える。

VI 本研究における課題

音読や内容理解などの学習活動に予想以上に時間がかかったため、展開Ⅱで、生徒が設定した学習課題について考えをまとめるための時間が十分に確保できなかった。展開Ⅱでは現代語訳のテキストのみを使い、学習課題の設定と解決を中心にするなど、指導の目的を明確にした活動を行うべきであった。そうすることで生徒自身が設定した学習課題の解決に向けて、更に深化した話し合いができたのではないかと考える。

(引用文献)

大村はま 1983 「古典入門ー古典に親しむー」『大村はま国語教室 第三巻』, p. 32, 筑摩書房
文部科学省 2010 『高等学校学習指導要領解説 国語編(平成22年6月)』, p. 61

(参考文献)

相澤秀夫 2010 「本来的な討論の授業の展開を」『教育科学国語教育7月号(通巻724号)』, p. 7, 明治図書出版
国立教育政策研究所教育課程研究センター 2004 「平成14年度教育課程実施状況調査(高等学校)ペーパーテスト調査集計結果および質問紙調査集計結果」, p. 81, p. 85
国立教育政策研究所教育課程研究センター 2007 「平成17年度教育課程実施状況調査(高等学校)ペーパーテスト調査集計結果および質問紙調査集計結果」, p. 133, p. 137
杉本圭三郎 1979 『平家物語』 講談社学術文庫